

## 《翻 訳》

## ヘラルト・ノートの人文主義法学論\*

藤 田 貴 宏 (訳)

## 『市民的賢慮について De civili prudentia』

〔499〕親愛なる聴衆諸君、かつて、私が、ネイメーヘン市、すなわち、魅力ある景観に富み、その歴史、及び、市民の気質と有徳さにおいて名高い町、そしてまた、私にとっては最も愛すべき故郷の町を、法学の教授のために離れるべきか否か迷っていたにせよ、今日その迷いを断ち切らせた理由は一つではない。各人がそれぞれの生き方について熟慮するようになる年頃から、私も学問の秘密にこの身を捧げ、何らかの中庸の資質が私に存する限りにおいて分相應の公的な名誉へと自らを鼓舞していたところ、私が公に法学を講じていた故郷の大学が近寄る戦火により破壊され、この学芸の女神ムーサの住処で貴州と偶然にも出会ったことはもちろん幸運であった。貴州の名声を認め、ネーデルラントの頂点にあたりとさえ考え、学術のあらゆる分野に名声を博している貴州の人々を知っている以上、これほど多くの名士が知られているこの場所で彼らのまさに卓越した模範に倣うことを私は選ぶことにしたい。更に付け加えるな

\*以下はヘラルト・ノートGerard Noodt (1647—1725年)の二つの教授就任演説(1679年10月6日フラーネケル大学及び1684年2月12日ユトレヒト大学)の試訳である。両者は、ノート自身後に未完の主著『学説彙纂注解 Commentarius ad Digesta seu Pandectas』の序言において参照を求めているように(Van den Bergh, The Life and Work of Gerard Noodt [1988], 264 参照)、人文主義法学の意義と方法一般をめぐるひとまとまりの論考として読むことができる。翻訳にあたっては、1760年レイデン刊『著作全集Opera omnia』第1巻所収のテキストに拠り(499-508頁)、原テキストの頁数を文中に「…」で注記した。

らば、私はかつてここで法律家としての名と資格を授与され、今や同僚として呼びかける人々の内に幾人かは、かつて未熟な私の証人あるいは判定者として出会った人々でもある。喜ばしいこととしてそれが思い出されるとともに、この高名な教授団に迎えられることは非常に名誉なことと思われる。しかも、この栄誉は、私が自ら求めたものではないが故に一層有り難い。つまり、私は、当該人事に関わる人々に周知されたことを知る前にそのような栄誉ある地位に選任されていたのであり、結局、私であると知らされたその日に、高名なビルト郡長ウィレム・ファン・ハーレン閣下を介して、共和国から私宛の辞令がこのような名誉であることを知ったのである。これによって私がどれほど勇気づけられたかは諸君にも容易に想像がつくだろう。すなわち、ヨーロッパ全体に関わるネイメーヘンの和平条約によって、これまでネーデルラント連邦のために名誉ある任務を担ったどの人々よりも、今や称賛的となっている閣下を、この公の辞令の通達者として迎えることは私にとってこの上ない栄誉であったし、閣下の最大限の厚意に対する返礼として欠けるところのないよう提示された職務を引き受ける気持ちになった。その一方で、私は、高慢であるとの噂が立つのを避けるため、これを断ろうとしたけれども、私の沈黙が能力の欠如ではなくむしろ臆病な心根に由来すると思われるのを恐れた。加えて、この私の就任演説が栄えある職名への畏敬の念故に諸君の支持を得ることになるならば、それは私にとって魅力的でもあった。しかも、親愛なる聴衆諸君、良識の研鑽に努める者全てを最良の模範によって愛護する諸君が常に進んで示してくれるあの類い希な厚意は私を捨て置くことがない。それ故、しばしば他の人々の利益となってきたこの厚意は、諸君の私に対する気持ちの証しとなっている。そうである以上、この演説を開始するにあたって私の顔、舌、そして、心を強ばらせている困惑を、この度の演説の機会に幾らかの感謝の念を示そうとする私の内気さから取り除いてもらう以外に一体何を諸君に期待できようか。

というのも、親愛なる聴衆諸君、私は、市民的賢慮について論じようと考えているからである。実際、他に如何なる論題がこの市民的賢慮に優先し、あるいは、匹敵するのか私には分からない。簡潔に言えば、市民的賢慮は、自然的な優美さの故に気品に溢れ、同時にまた、有益さの故に実り豊かであると評し

得る。これ以上くどくどと並べ立てることは控えよう。親愛なる聴衆諸君、市民的賢慮はそれほど議論の余地なく明白なものである。この学芸の女王は、何らかの仕方で神事もしくは人事に関わる事柄であれば何であれ、それをとりわけ愛護し支持する。そしてまた、それは、ある人の考えとおり、法廷の約束事やローマ国民の市民法の内部に留まっているわけでもない。たとえ、市民的賢慮の偉大さがこれほど広範に渡って十分に明らかになっているとしても、この世の法則、すなわち、神と人類全体から成る偉大な共同体を存続させている法則について論じる者の榮譽は非常に大きいであろう。私がそれら双方を法則と呼び、自然法及び市民法に訴え、これほどの偉大さ、人類のこれほどの誉れを一言であなた方の頭と魂に想起するよう要求しているこの時に、あなた方は何を期待し何を求めるのであろうか。

我々に既に知られているにせよ、あるいは、将来生み出されるにせよ、あらゆる法が、天空に由来し、不滅の神の贈り物であり任務であることについて誰か異議を唱える者がいるだろうか。我々は事物に即して考え出された論拠に依拠している。すなわち、あらゆる法は、それが如何なる法であっても、自然、つまり、共同体として集結しているにせよ、一人一人別々であるにせよ、人類全体の平穏で幸福な生活を目指す自然の唯一つの法則に帰するのである。実際、法や信義の結びつきなくして、何を自然と見なし解することができよう。確かに、人間の内には、何らかの法が自然に匹敵したことがあったかどうか疑う向きもある。諸民族の合意が粗野で愚鈍なことを想起させるのに対して、無理がなく確実で、しかも、自然によって種子の内に既に吹き込まれている理性は分別ある事柄を想起させ、事物の必然性に応じて神の摂理を確証している。この理性から、どれだけ多くの人間がいる場合でも、あらゆる人間を、異質なもののから遠ざけると同時に、何によって促されるにせよ自己保存へと不可避の必然性を伴って駆り立てる力が引き出される。確かに、そのような準則は、人間的な欲求に端を発するものではなく、卓越した人々の徳と賢慮の決断とともに、どこかの銅板や銅表に書き込まれたのである。しかし、この準則が事物の本性或神の意図とともに何処に由来するのかについて、既に法則は存在している。それ故、我々が市民的賢慮という学芸の威厳や便益について目を向ける限

り、以上に述べた如く、問題は論じ尽くされている。正しい理性の刺激と運動によって人間の優美さを保証する最高神の卓越性について考える者にとって、人間の事柄を促進し保持するために自然の聖なる掟の実益、目的、原因を解明する当該学芸の栄光と成果がどれほど偉大であるか知らないなどということが果たして許されるであろうか。

親愛なる聴衆諸君、私は多くについて述べたけれども、これで全てではない。諸君はもっと多くのことを期待しているはずである。[500] というのも、これまでは、各人が自らのために注意を払い、一般のために議論することがなかったからである。まさにそのようなものとして諸君は市民について論究している。すなわち、諸君は、人間というものを、獣と同様に耕作地や森に一人一人散らばり、恐らくは、孤独の危険や不便を体験し、共同作業や法律に基づく社会の有益さを経験することなく、それ故、そのような有益さを理解しないかあるいは軽視するものとみなしている。それでは、神と自然が促すところに従って、そのような人間たちが、互いに結びつき、共同生活の利便を辛く哀れで奴隷のような孤独の不便と比較し、次いで、自然的自由を放棄した者として、自らの力と利害を自分自身の意向ではなく法律の決定に従って判断しようと欲するようになるために一体どれほどの出来事があったのか。更に加えて、集まった人々をまとめ、まとまった人々を支配し、いわば市民的身体の魂と精神としての最高権力への恭順によって、包み制約するために、どれほどの賢慮と精励とを要したか。創造主たる神によって確立された神聖な連帯の威光が、私の魂にとってあまりに大きいために、私の眼を欺いているのか、あるいは、そのような連帯が、人間としての外面、優美さ、優雅さを与えてくれているのである。つまり、連帯は墮落させ、危機をもたらし、倦怠を新たに引き起こした。連帯は、一人一人に平穏を与え、全員に希望をもたらしたにもかかわらず、このような連帯からあなた方は離れてしまった。全ては荒廃し動揺し不確実である。生きる理由などほとんど残っていない。市民的熱狂のなすがままに敢えて市民法を廃せよ。どうか教えてもらいたい。自由、すなわち、自然の非凡な賜物は一体どこにあるのか。もし可能であるのならば、物の所有について証明してもらいたい。それがたとえ父もしくは母の希望や子への愛情の故

に遺された物であるとしても、自らの相続財産として一体どれほど要求できるのか。契約、とりわけ、誠意契約とは何か。債務には如何なる効力があるのか。ところで、万民法はこれらについて知っている。願わくばそうであって欲しい。しかし、調べてみると、それは名目に過ぎないことが明らかである。それはつまり、万民法が、自然状態において、暴力、狼藉、不正に対して、戦争や武器によって裏付けられ、法律が制定された後は、最高命令権の権威が司法の職務を通じて自然の真理を追求するのでなければ、である。おお、市民的賢慮の大いなる栄光よ。如何なる賛辞をもってこの市民的賢慮を誉め讃えるべきか。如何なる言葉をもって。あらゆることが思い浮かべ、あらゆることを述べても、この学芸の意義を誉め讃えるには不十分である。というのも、我々は、この恩恵によって、健康で呼吸し生きているからである。この市民的賢慮がなければ、我々は、人間に似た獣以外の何物でもない。つまり、互いに互いを尊重することなく攻撃し、助けることなく略奪し、守ることなく破滅させ、更に言えば、貪り合うのではなからうか。それ故、敢えて言うが、人間において習俗の野蛮さを和らげられたのは、要するに、この学芸のおかげであり、それは、無欲、中庸、正義のきわめて信頼でき良心にかなった神聖な逃避先なのではないか。「賢明に振る舞え」という言葉は、人間の過ち故に混乱した事柄を確実な処世訓にまとめるこの学芸を信じ、市民としての光栄に浴することにこそ相応しい。あるいは、もしお好みであれば、これを神をお告げと言ってもよい。というのも、確かにそれは神や自然の御業を代行することになるから。

当然ではあるが、個々の人間が互いに結びついているように、各市民もまた互いに団結している。というのも、自然の力や刺激が自ら生み出した人間を捨て置くことは決してなかったからである。それどころか、自然は、一人一人の人間と同様、市民的協約によって結びついた者たちを、善と便益へと導き促している。そして、これと同じだけの力で、反対の事柄を遠ざけ排除している。そうこうする内に、何が善で何が悪であるかは実際に確定された。しかも、自然は、それを、こちらの人々のためでもあちら人々のためでもなく、あらゆる場所、あらゆる時代、あらゆる事項や状況に関して、全く同様に定めている。簡潔に何かを命じ他の何かを禁じるけれども、大抵のことは未決定のままにし

ておく。これらのことをより正確に述べるのがここでの課題である。

市民的連帯が、実際そうであるように、人間の幸福の核心であるとしよう。この連帯を成就し保持するために必要な事柄を自然の摂理は決して明らかにしてくれない。しかし、自然の摂理は、善いこと、正しいこと、誉められるべきことを無限定に言明する。しかも、一人一人に対してだけでなく、市民に対してもまた、いわば黙示の法律ごとき理性の働きかけに基づいて常に命令を下している。他方、彼らにとって否定され排除されるべきことは、悪いこと、恥ずべきこと、憎むべきこととみなされる。それ故、自然の摂理は、全ての者に対して分け隔てなく、それらを禁じていると信じるべきである。それでは、これらの内で、私的な恣意に委ねられているものは何か。共同体の権威もこの摂理以上に力を発揮するわけではない。たとえそれが如何なる仕方でも、いかなる状況と条件の下に啓示されるにせよ、人間に唯一残されているのはこの摂理への恭順という榮譽である。何人も、自然が害悪であると言ったり、あるいは、市民共同体(=国家)の法律によって、神の下での敬虔、人間のもとでの正義と誠実がもたらされると主張してはならない。かつて、正しい忠告に常に異を唱える粗暴で奴隸的な追従が触れ回ったのもこの点であった。それは全く狂気の沙汰であった。事実が明らかにしてくれる通り、自然法は人間の意見には左右されず、神の摂理によって確立された事柄は、永久、不変、不可侵であり、国家の内部においても、外においても、例外なく、地球の運動のごとく保持されねばならない。人間の手になるあらゆる法律は、ただ単にこの事柄の実現に役立つべく整えられるのである。

一方で、これらの事柄とは別に、中間的で、それ自体において善にも悪にも与しない事柄が存在している。従って、これらの点については、一人一人の孤立した人間に対しても、市民的協約によって連帯した人々に対しても、自然が命じたり禁じたりはしない。そればかりか、未だ市民法が定立されていない場合の個々人に対してと同様に、市民に対しても、自らに利益となることを企て、有害もしくは無益と思われることを否定し無視する完全な自由が認められている。国家にとっても、国家の外の個々人にとっても、自らに何が相応しいか判断する者は自分自身に他ならない。それはつまり、人間相互の最大限の平

等のためであり、また、国家相互の一層の平等のためでもある。そうである以上、国家においてさえ未決定の事柄に関して、他者に対する何らかの義務や強制が伴うことなどあるだろうか。親愛なる聴衆諸君、そのような義務や強制は決して存在しない。ただし、市民法に基づいて国家がそれを受け入れた場合は別である。実際、これらの事項の内、何れが全体にとって役立ちあるいは害となるか判定するのは、神と人間の合意によって市民法の事項に関する権限が委ねられた国家の領分である以上、自然が未決定のまましておいた事柄の内では何れを法律の強制によって義務づけるべきか、そしてまた、何れを各人の恣意に委ねるべきかを探求し判定するのが国家であるかどうか疑うことなどあるだろうか。従って、国家において、国家自身が禁じたり命じたりしていないこと、そして、自然が無差別のまましたことは全て各人に恣意に委ねられている。そうこうする内に、これが、市民法の源泉となり、人間の法律の素材となった。そこから、訴訟手続が生まれ、所有、取引行為、債務関係、後見、保佐、贈与、有効及び無効な終意処分方式も生まれた。これらの全ての未発達で不恰好で単純な原型は自然法もしくは万民法に由来する。これらに境界、型式、堅固さを与えたのは市民的運用である。市民的運用は自然の端緒から完全には離れていないけれども、それらの端緒に全体として従っているわけでもない。しばしば、何かを付け加え、ある場合には廃止している。何れのやり方も中立的で任意の事柄を法律の鎖によって拘束するものであり、それ故、それまで存在していなかった善や悪をそのようなものとして成立させる。しかし、名称の確実さは永遠に保持されるわけではない。ある場合には、説得力ある運用によって、意味を転換し変更することもある。市民的運用が追求するのはそのような説得力ある運用だけなのである。

しかしそれでもう十分である。私が自然のみならず国家の法についてもまた探求していることにどうか気づいてもらいたい。そのような法は、全ての者に示された生きる法則に基づいて、各人にその自由を確証する一方で、別の場合には、義務や特有の負担に妥容するように見えることもある。というのも、それは、人間が課した負担ではなく、自然に倣って、卑しく弱い者にも高貴で強い者にも等しく当てはまる法律上の負担であるから。諸君は、互いの傲慢さの

故にその資質が台無しになることを決して望まないであろう。そうではなく、自然の摂理が促すことを、いつでも敬虔さと慎重さをもって、何を汚すことなく、許されたことを行うよう望むはずである。そして、これこそ正真正銘の自由であり、これ以外に自由はない。法律の支配の下、安全に、何も恐れることのない市民こそ自由である。彼は望むことなら何でも為すことができ、法律上行うことが禁じられていることを敢えて行おうとはしない。

それでは、我々は何を証明すべきなのだろうか。最初に述べたとおり、それは、個々の人間、及び、市民の権利、つまり、その力と幸福を、人類の連帯による社会関係、すなわち、まさにそのような連帯の実践によって確定することである。しかしまた、別の場所や別の時代において異なるどころか矛盾することさえある法というものが遵守されていることにどうして驚くべきであろうか。もしそうであるとするならば、人間に共通の自然法ではなく、より品行方正な諸民族の自然法を合理的に定義することなどどうしてできようか。〔501〕しかし、貴方が誰であれ、古びた冗談で互いに媚びへつらっている大衆の一人であるならば、どうか私の前から立ち去ってもらいたい。そのような大衆は、しばしば教養、典雅さ、人文的学識を言い訳に、私人としては、無為に過ごし、何の役にも立たず、偽善的で、自己を軽んじ、他人に阿る一方、公の場では、略奪者となって、その支配欲の故に有害で危険な存在である。親愛なる聴衆諸君、簡潔に述べることにしよう。お気に入りの民族を思い浮かべてもらいたい。あらゆる民族の立脚点は唯一つである。それは、その内部の全員にとって唯一つの目標、市民的生活という社会関係である。ここから全ての者の権利が、たとえその効力は様々であるとはいえ、生成し、それらの中から、自らの問題に都合がよいとの評価に応じて、ある者はこの効力を選び、ある者はあの効力を選ぶ。また、最初はそれを維持し、ある時には、誤りに気づいたり、新たな機会を得ることで変更する。しかし、どのような仕方にせよ、道は続いている。つまり、それは、連帯の権利の有用性を維持することに意を用いる人によって保持されるのである。以前と変わることなく、利益があれば善と誠実を証明し、状況が変われば不品行と悪を非難するのはこのためである。今正しく衡平であると言われていることが、かつては不正で不公平であると主張されて



いた。このように、共通の利益を保持するための方法や方式は時や場所とともに異なる。一方、如何なる場合でも、唯一つ正しい自然の理性は自明であり、如何なる場合でも、人間の法に基づく社会を維持しようとする真の欲求だけは明白である。たとえ、そのやり方が異なり、しばしば人間らしく誤ることがあるとしても。

しかしながら、疑う余地のない明らかな事実をわざわざ引き出すことは差し控えよう。というのも、白状してしまえば、あらゆる法は、自らを人間と呼ぶ全ての者たちに行き渡り自然の恩恵によって分かち与えられた理性に由来しているからである。今我々が吟味しているのは、神に代わって自然法を執行するはずの知識が如何なるものでどの程度のものなのか、そしてまた、自然法が人間による協約の權威を承認し指導し守護するのは如何なる場合なのかであり、そのような吟味は、何がさしあたり自由と恣意に委ねられ、何が協約であり、何が榮譽であるのか、つまり、自然法にとって何が有害で何が利益となり、何が自然法に属していないと考えるべきなのかの論証を通じて行われる。

親愛なる聴衆諸君、確かに私は、ローマの人々(私は、支配を拡大する戦争と人類共同体への軽視に由来するローマ人の罪惡を残念には思うけれども、その市民法に対しては最大限の敬意を表する)においてこの市民的叡知に対する恭順の態度がみられたということを否定しない。周知のように、ローマ人は、市民的叡知を神々の儀式や祭礼の内に位置づけ、正義の女神ユスティティア自身の手によるかのように祭司たちによって法が定立されること、そして、これこれの法律を論究し、これこれの方式書を作成することを望んだ。つまり、市民法をいわば權威として遵守しなければ、大抵の場合、共同生活の鎖は緩められ、解かれ、打ち碎かれることになった。また、その後法学がローマ人たちに受け入れられたことも私は知っている。ただし、その時もまた、とりわけ権力者たちの任務や権限に属することによって、法学は存続した。当然の如く、貴族の若者たちは、法学の学歴によって来るべき機会に備え、名誉ある公職に就くことを志した。法務官や執政官の職にある者が凱旋時や重大な機会において法律の知識を公言することが歓迎されたとするならば、それも当然である。彼らは、ある時は、法や裁判についてその理由を論じ、またある時は、家では椅

子に座り、紛糾する裁判所では歩き回りつつ、法について相談する人々に答え、またある時は、神々の祭礼を司り、公共の神事、及び、神法について注釈を著し、またある時は、法廷での法の議論において準則を確定し、曖昧な法律を理性と権威によって操り、厳格な法律を真の力強い衡平さによって緩和し、無用となった法律を何か巧みな言い回しや想像力で回避し、またある時は、天性の能力を備えた若者を教授によって矯正し、それ自体教訓を伴った賢明な推測によって、当時では例えば、共和国に対して、その行く末がどうなるかを教示した。それ故、軍務と政務の栄光に法の知識を付け加え、法廷にあっては手振り身振りによって、家にあっては助言によって、法律や裁判のために多くを促進し守護し、後世の人々に対する評判と、現在におけるローマ国民と元老院への恭順の双方を実現すること、これは確かに、榮譽ある偉大なこととみなされた。

親愛なる聴衆諸君、実際私は、ローマ国民の出現と発展に注意を向け、何故彼らが最大限に支配を追求しそれを手に入れ保持し得たのか自問し、彼らがその能力と運、更には、法に非常に多くを負っており、あれほど僅かで取るに足りない端緒からこれほどの豊富な成果へと到達できたのは法律への敬意の故に他ならないと、常々考えている。もしそれがなければ、我々は武力や富や天性に期待するであろう。当時、ローマ国民は、どれほど多くの友好的民族と出会いと敵対的民族と戦ったことか。私の誤りでなければ、武力や富に比べて知識が優れている民族は僅かで、多くは劣っていた。我々は信頼と習俗と努力を一つのものと考えるべきである。実際、ローマ国民が、内政と軍事面において多くの民族を上回ったかどうかは疑わしい。例えば、武力が台頭するのは容易であった。都市において、いや都市のみならず、宿営地においても教練が行われた。双方において十分な名誉心が生まれ、幸運にもどれほどの勇気を発揮したことか。他方、贅沢と貪欲が国を襲ったとき、人々は素朴さを誉めるべきものである以前に過酷さと呼んだ。こうして、彼らは、節制、正義、勤勉を放棄し、善悪の区別と同時に、悪徳の罪と勇氣ある偉業との区別を排した。こうなると、兵士、馬、武器、軍隊が如何に強力であっても、国家はほとんど成果を上げなかった。なぜなら、それらがいつの間にか流出し、他の部分に向かうの

は必定であったから。やはり、国家にとっては、市民の連帯を最良の法律と習俗によつて的確に修復し保護し続けることが重要であればあるだけ、国家の保証人、監視者、保護者にあたる当該学芸を誠実に良心に基づいて尊重することもまた重要なのである。

このような学芸が冷たく空虚であると声高に叫ぶ者が民衆の中から現れるであろうことを意識していないわけではない。つまり、つまらないものに拍手喝采を送り、叡知と天性による教養から隔たった、しかも、判断力に頼ることが少なくむしろ記憶力に左右されるありきたりの知識が誉め讃えられているというのである。更に、音韻に気を使い、個々の文字に拘り、詭弁を弄することが多く、大抵は、雨水、川の流れ、下水、ドングリの選別といった要するに無用な事柄について助言し、重要な任務を委ねられることは稀で、最も大事な国家について考えることなどほとんどない、というのである。

この古くからしばしば繰り返されている非難は、法学をあたかも日々の雑事であるかのように扱う人間のそれであつて、平和を長期に渡つて法律と習俗で飾り立てる叡知という神々しく称賛されるべき姿を法学に期待する人間のものではない。その内、かの不器用な非難の声は、未熟ではあるがそれまで最大限の努力を払っていた若者たちの耳と同時に魂を捉えるところとなった。たとえ分別ある人々からは軽蔑されようとも、未熟な人々によって騙されることのないように、さあ一戦交えようではないか。我々は、実務や叡知、そしてまた、何らかの人文的研究に属する事柄が法学からそれほど隔たったものではないということを異論の余地なく明らかにするつもりである。

人は言う。当該学芸は(たとえ神々の意に適っているとしてみても)つまらないものであり、重要でもない問題に心を悩ましている、と。この点を受け入れようとしている親愛なる聴衆諸君、反対に私がこの学芸について次のように述べるところをどうか見てもらいたい。すなわち、市民の平安を求めるこの学芸は、ありとあらゆる種類の紛争が回避されるその機会を決して見逃しはしないし、平和が保持されている限り、国家の内部には共通善に対する信頼が存続するのである。それ故、本学芸が非難されるなどあり得ないことであり、そのように重要な事柄を追求する者の努力はむしろ誉められるべきものであるし、

また、本学芸が小さな事柄を決して無視することではなく、逆に、重要なことを看過しない限りにおいて小さな事柄にも取り組む者の努力は誉められるべきである。実際そうではないだろうか。まず第一に、当学芸は、華々しく多忙な生き方に必要な責任と配慮と情熱を教示し讃え完成させる。そのような学芸は何を望み、何を行い、何をその本質としているのか。それは、民会、元首の顧問会、あるいは、元老院が最高命令権の摂理と權威に基づき最重要の国家のために必要とみなす事柄全てに従事することである。更に、政務官たちの使命感、配慮、責任感、元老院、国民、元首の意思を、それぞれの職責に応じて実行するのではないか。これによって、対外的には安全で、対内的には分別をわきまえた国家が生まれる。それはつまり、兵力及び資財に溢れた国家である。

〔502〕そこでは至る所で健全な自由を享受できるのではないか。そのような自由から帰結するものが最も重要なのである。しかし、国法をもたらすのはその一部にすぎない。残された部分は何をもたらすのか。それは、神官たち、祭礼、儀式に関係する。つまり、同じ正義への義務づけによって、我々は、神と結びつき、続いて、人間と結びつくのである。前者は敬虔と呼ばれ、後者は良心と呼ばれる。それらは、誠実に実践されるならば、精神の改善、つまり、徳及び品位をもたらす格好の手段となると同時に、神と人間の平和のための手段ともなるであろう。しかし、もし誠実に実践されなければ、それらは、迷信に囚われた魂をいわば熱狂的な刺激によって不安と欲望と不信心へと少なからず陥れることであろう。それ故、魂と知性に関わる事柄は、自由で自発的でなければならず、また、犯罪や武力ではなく、神と人間とに共通の理性による連帯によって、把握され、保護され、促進されねばならない。習俗を退廃させ、党派の陰謀によって国家の危機をもたらすことがないようにというのは、極めて正当な警告である。さあ今こそ、この学芸が狭くも無用でもない事柄にどれほど寄与しているのか明らかにせよ。実際、我々は、対内的には教会及び世俗の事柄、対外的には戦争及び平和に関して、本学芸の著しい有益さを目にしている。本学芸が記憶力と判断力の何れにより多くを負っているのか、さあ吟味せよ。

一方、本学芸と叡知的教養との類似性について如何に述べるべきであろう

か。後者の最良かつ固有の功績は習俗に由来し、他の部分は人目に付かず、幾分かは自然そのものの内に包み込まれている。これに対して、前者の徳と公務の指導者たる本学芸は自然法と国法から何を引き出すのか、公事と私事双方に没頭する人間に相応しくない事柄とは何か。私は既に述べたことを繰り返そうとは思わない。若干の、しかし、明瞭な例を示すに留めよう。例えば、我々が婚姻と呼んでいる男女の結合がそれにあたる。これ以上に国家にとって役立つものがあるだろうか。たとえ短い期間でさえ、この苗床なしに国家が存続するだろうか。これほどの運命の変転の中、人間にとってこれ以上に気高い慰めがあるだろうか。にもかかわらず、自然の下でこれほどに必然的な結合によって、我々が人間的欲求の快楽にふけっていると疑われるべきであろうか。なぜ逆に、市民的慎みが淫行、不信心、破廉恥について申し開きすべきであろうか。一夫多妻を承認すべきであるのか、それとも、罰すべきであるのか。先行する婚姻関係にとって、あるいはまた、最初の配偶者の死亡から帰結する事柄、とりわけ、その者から生まれた子供たちにとって、如何なる扱いが相応しいのか。有害で浪費への傾向の故に、夫婦間における贈与、すなわち、それによって富裕な者が後に貧困になったり、逆に貧しい者が後に豊かになるような、誠実な愛情ではなくむしろ金目当ての取り決めを、有害で過剰なものになりがちであるとの理由で、禁ずるべきか。離縁や離婚の許可を、進んで与えるべきか嫌悪しつつ与えるべきか。過去に結ばれたあるいは将来結ばれるであろう婚姻関係を、引受契約や問答契約、刑罰の鎖で拘束することは誉められるべきか。子供の教育について不確実な賭けをすることになる家父の権限とはどの程度のものか。幼児や未成年その他の未成熟さに対しては、彼ら自身の害にならないように、あるいは、後見や保佐を口実に彼らが搾取されることのないように、如何なる注意を与えるべきか。以上長々と述べてきたけれども、更に付け加えるならば、事務的な必要や取引習慣の変化に由来する合意や契約の多種多様な方式は、生活全体にとって役立ちまた相応しいと言えるのか。また、不法の種類や根拠について迷うことのないように、一つ一つの事柄の性質、あり方、限界を定めるにあたって、叡知と状況に応じた確かな判断力とが必要であることを否定する者がいるだろうか。そして、それらの事柄の内、誠実さ及び

不誠実さは別としても、衡平さ及び不公平さ、つまり、公的にも私的にも有益もしくは有害な事柄の意義と性質にこそ、判断を下す者たちの努力は相応しいのではないか。市民が、如何なる罪惡について、如何なる刑罰をもって、如何にして処罰されるべきか考慮し吟味することもまた、同様の勤勉さに属するものと考えられる。私は、幾らかの人々を除けば、市民が将来より善くより公正になるであろうことを否定しない。しかし、この時代のこれほどの怠惰と怠慢の下で、敢えてそれを期待する者などいるだろうか。つまり、刑罰という制約が無ければ、如何なる実りももたらされないのではないのか。裁判所において不法行為、悪行、犯罪と呼ばれているものが、賢者の下では、罪深さではなく人間の境遇故の過ちとみなされていることを諸君は御存知ないだろうか。人間は、如何に無力であるとしても、自らの幸福に資することは、如何なる場所と時代にあっても真の諸原理から正しい仕方導き出してきた。今ここで自然の摂理をめぐって議論するつもりはない。たとえ我々には見えないにせよ、我々にそうさせている原因はそこにある。無限に善を追求し悪を回避せねばならない我々の状況の悲惨さを嘆くのは当然であるが、それらを求め願うこと、ましてや吟味し判定することが法にあたるわけでもない。では、人が賢明で、失敗することがないのは如何なる場合か。諸君に尋ねるので答えて欲しい。私自身、正しく善き諸原理から真理と善が導かれるのと同様に、明らかに誤った諸原理からは誤謬の集まりが流れ出るのは、自由意思によるのかそれとも必然であるのか迷っている。ああ、全くそうなのだ。人は、自らの利益を追い求める時でさえ、義務づけられたかのように、自然に従い、真理のために理想を重んずることがある。つまり、大きい善よりも小さい善を、将来よりも現在を、公事よりも私事を優先させるわけではない。知らずにそうするのか、あるいは、それが彼の本質なのである。人間の弱さという被告を訴えるべきなのか、それとも、そのような被告の不幸に同情すべきなのか。慈悲はその機会を選んでい。私はそのことを思い出して容認するのである。しかし、例えば害を及ぼす恐れのある混乱や破廉恥の蔓延は回避されねばならない。それ故、我々は、刑罰、つまり、確かに峻厳で過酷ではあるがしかし必要な処置について吟味すべきである。しかし、未だ犯されていない過ちについてはそうではない。生じ得

るかもしれないがまだ生じていない過ちはどうか。次の点を肝に銘じるべきである。すなわち、もし、人情味のあるやり方が度を超して、手や心を国家から遠ざけるならば、人は法を受け入れないであろうということを。それでは、自らにも国家にも全く相応しくない空虚な復讐として刑罰を用い、残忍さへと向かうことが、思慮深い者のやることであろうか。決してそうではない。それではどうするのか。彼を不名誉な状態に放置すべきである。他人に対して有害で、法律によって定められた全体の利益への道筋から逸れるような欲求が生じないように注意し、そしてまた、法律の限界を超える悪しき欲望が誰かを捉えたならば、悲惨な結果に至る刑罰の過酷さによって、愚鈍な誘惑を取り除くことだけで十分である。このように、純粹な理性に即して判定される罪過は悪しき心根に由来する。市民的連帯の完全性を保持する人間の法廷において、この連帯にとって有害な謀議や行為が、威嚇され抑止されることを嫌悪すべきであろうか。ただ我々は、獅子、狼、あるいはそのようなもの、つまり、彼の罪過というよりもむしろ獣性に基づく有害な怪物を退治するのである。このような怪物と、その粗暴さの故に市民らしくないやり方で国家に害を与える人間とは確かに同じではない。しかし、刑罰の唯一の目的は規律の保持に由来する利益である。この規律がなければ無であり、国家の平安も期待できない。更に言えば、人間の本性や徳という才能や悪しき習性の原因と同時に、中間のどちらでもない事柄をも深く見通した者以外に、そのような利益を正当に評価できる者がいるだろうか。それは、幾人かの人々には直ぐに思い当たる通り、善良で思慮深い医者、病が進行しないように、あるいは、治療が手遅れにならないように配慮するのと同じである。それ以外であれば医者は待たせておくものである。つまり、人間の本性が従順であり、叡知が習俗の粗暴さを和らげている間は。刑罰によってこれらを台無しにしてはならないとの忠告は顧慮されない。刑罰は、自分で対処できる事柄についても、模範として作用することで有効に修正する。実際、法的命令の設けることに対して法律は如何にも遠慮がない。この極めて思慮深い学芸は自らの諸準則とこれら法的命令とを区別してきた。つまり、諸準則が叡知の教えであること、つまり、それらによって、教示し説得すること、決して強制しないこと、神の罰を除いては刑罰によって威嚇しな

いこと、これらの中にも真の悔悛を認めることを、望んでいるのである。これに対して、法律や規則を命じること、禁じること、罰すること、許すことは、議論することでも、助言することでも、たとえ真の悔悛であっても悔悛を認めることでもない。このように、後者は、権限のある限り、危険で有害な行為を正す。前者は心の純潔を求める。すなわち、許されているからではなく、まず何よりもそれが適切であるから、つまり、敬虔さ、慎み、正義、自由、誠実さ、勇気、そしてとりわけ、正直さに相応しいからこそ、それを自らのものと考えているのである。だとすれば、それは一体何か。〔503〕ある人が言うように、偽りの哲学ではなく真の哲学を愛することではないとするならば。

しかし、叡知に基づく当学芸への称賛と同じだけの称賛が人文学的研究によってもたらされる。諸君も御存知の通り、それは、法廷や元老院において、あるいは、元首の下で、才能に基づく教養を問題解決に役立てた人々の領分であった。彼らが何において著しく秀でているのか、判定することなどほとんど不可能である。威厳、あるいは、慎みにおいてであろうか、実務上の経験、あるいは、勤勉さにおいてであろうか、学識、あるいは、議論における配慮と典雅さにおいてであろうか。確実に明瞭な事柄など私は信用していない。法学が、一方で、語句の解釈に、他方で、問題や効用の識別に専心していることを、知らない者がいるだろうか。遺言や契約を、あるいはお望みであれば、法律や勅令を挙げるだけでよからう。この場合、言明者の意図が不明確であるならば、彼らの述べた事柄から、彼らが何を意図したかを我々は解明しようと試みるのではなからうか。それ故、我々は、長い年月の経過や言明者の習慣に応じて、ある時には変更され、しばしば取り消されることもある事実の由来や語句の意味に立ち向かう際、多くのことが文法学者たちによって入念かつ学識豊かに考案され教示されていることに驚嘆する。そして、法学の研究と努力によって多くの事柄が付け加えられた以上、それは法学自身の栄誉でもある。

ローマ国民の事績、公私及び新旧の習俗を知りたいとの好ましい衝動が誰かを既に捉えているのならば、そしてまた、都市や農村、神殿、別荘、庭園における、あるいは、婚儀や葬儀における、ローマ国民の節度、贅沢、楽しみ、優雅さを知りたいとの衝動が誰かを捉えているのならば、遺言、小書付、合意、



あらゆる種類の取引に基づいて法的紛争や問題が教示される場合以上に豊饒な教育上の源泉、あるいは、充実した素材が他にあるだろうか。しかも、以上のあれこれの事柄が、学説彙纂に収録された著作断片や、テオドシウス及びユスティニアヌスの両勅法集上の勅法によって、どれほど解明されるかは、感銘に値する。親愛なる聴衆諸君、市民法大全を、国内、国外、私的、公的、戦時、平時において、裁判において、法に関して、元老院において、民会において、元首たちの下で、上流の人々、中流の人々、下層の人々が、賢くもあるいは無謀にも、行ったありとあらゆる事柄の聖堂もしくは宝庫と呼ぼうとする人に私は反対しない。

以上が全くの真理であることを、親愛なる聴衆諸君、どうかわかってもらいたい。しかしまた、私がこの市民法大全唯一つをあなた方に指し示そうとしている、つまり、他に誠実で学識深い典雅な正確さに属する事柄を軽蔑すべきあるいは無益であると考えようとしているとは、どうか思わないでほしい。そのようなものは私からすれば忠告とは言えない。私は、我々のものを推奨し誉め讃えているのであって、他のものを非難しているのではないのだから。善き理解を目指す人々による確実で心地よい認識が全ての学芸にどれほど多く見出されるか、私は十分に分かっているし、そのような認識が自らを飾り立てるだけでなく他人を喜ばせることも承知している。この神事と人事に関わる叡知が如何に多くのことを求めているかを様々な見解に即して述べることで、私は、諸君にこの叡知の幅広さと有用さを理解してもらい、また更には、諸君が何倍もの喜びをもって促され、不確実で邪道なものが世の中に広まっているこの時代においても、この叡知の頂点に賢く素早く有利に近づき到達できる道筋を求めるよう望んできた。というのも、ある人々の無知や怠惰の故に、彼らの言う、単純で実務向けの何かが優れていると信じられ、教えられているからである。つまり、古の人々に倣って、知識に伴う優美さとともに叡知に到達すべきであるとはされていない。一体何れが愚かで不思議であろうか。この極めて高貴な学芸が一日や二日で生まれたものでも、一人の天才や一つの好機によって完成されたものでもなく、国家の習俗、利益、苦難に応じて徐々に積み重ねられてきたことをあなた方が思い起こすのは、決して無益ではないだろう。つまり、

常に同じ状態に留まっていることは決してなく、雲の様子が風次第で変化するように、この学芸もまた公事及び私事の行く末次第でしばしば変化し適応してきたのである。これほど長期に渡り様々な機会を経た本学芸の運命や変転を、何かを命じ変更し廃止した時代時代に関する極めて注意深い考察を通じて忠実に再現すべきであるということ、そしてまた、古い事柄を変更し緩和した新しい事柄だけではなく、古い事柄からも遠ざかるべきではないということについて、もし諸君が理解を示してくれなければ、私は更に多くのことを付け加えたかもしれない。

要するに(そうすることがこの学芸の偉大さに相応しい以上)、本学芸を、その繁栄に寄与した人々、そしてまた、これほどの年月を経てもそれが全世界の法廷において遵守され大学において教授されるに値すると考えている人々の手に確保しておくことをどうか妨げないでもらいたい。本学芸は、如何にも内容豊富であって、一部はローマ国民の法律と習俗から、一部は人類共通の法から構成されている。それ故、各人がそれぞれのために万民法及び共通感覚が何を命じているかに注意を向けるべきである。その後で、法律、元老院決議、永久告示録の文言がどうであるか。そして、何が復元可能で、何が失われたとみなされるべきか。誰が作者で、如何なる順序、如何なる根拠、如何なる意図をもって作られたのか。それらについて古代の人々がそれぞれの著書や時代において何を注記してきたか。元首たちの寛大さが解答や勅令を通じて厳格さから解放したのは何か。出典に関する記名や添書は学説彙纂や勅法彙纂の中の何を関連づけ、何を区別するよう促しているのか。更には、古代の人々の習俗や欲求から、彼らの言語習慣から、つまり、古代史全体から、何が解明され得るのか。痕跡から辿ることのできる諸学派の違いとは何か。法準則とは如何なるもので、その法準則に反して公共の利益のために受け入れられたものは何か。トリボニアヌスは何を上手く何を拙く行ったか。文面や句読法に如何なる信用性、一貫性、相違がみられるか。これらの点についても注意を向けるべきである。勤勉で忍耐強い諸君には以上の道を是非とも進んでももらいたい。そして、法学の影ではなく、法学そのものを見出してほしい。未熟で極めて怠慢な解釈者があるいは諸君を騙すかもしれない。それよりは、諸先達と共に、ローマ国

民という世界で最も優美な証拠に抛りつつ古代の典雅さの回復に興じるべきである。諸君は、自らの努力が遠く離れたものを見極めるのに足りないが故に、このまま現状に留まり辛抱し続けるのであろうか。それは誤りである。もし不正が時と共に消え去るのであれば、全てに絶望すべきではない。時は多くを隠してしまうのであろうか。むしろ多くを明らかにしてきたのが時である。もし、何かを先人から受け取ったにもかかわらず、それを我々に続く人々に引き渡さないならば、我々は怠けていることになる。しかし実際には、諸君は、わき道を恐れ、煩わしいやり方を警戒している。つまり、徳に至る道は平らで快適であると信じている。それでは、徳というものが厳しく困難な事柄を絶えず求めるとしたらどうであらうか。逆に、徳とは努力であり、勤勉さとは、困難を、それがいかなるものであれ、和らげるものなのである。我々は模範に倣い、自然が禁じている事柄以外は、困難で不可能なことは何一つ存在しないと考えることにしよう。それ故、諸君はそのような努力を私に示してもらいたい。私は、諸君が求める限り、法学を教授しよう。豊かさ、称賛、栄光が諸君の頭上にあり、目の前に示されているのだとどうか信じてもらいたい。私はまさにそう言いたいのである。というのも、正しい道筋で物事を追求するならば、つまり、諸君が、いわば国家の苗床に相当するこの場所に蒔かれた種であるならば、この場所であなた方の知識は増大し、国家の繁栄のために有益かつ相応しいとみなされて、愛すべき豊穰な果樹園たる各地方へと運ばれて行くはずであるから。そうである以上、気品ある優美な諸学芸を学ぶに相応しい諸君らの若さ溢れる今この時に、どうして諸君は、目覚め、実行し、市民法のみならず万民法上の公法私法がいわば全てに共通の事柄としてもたらされるものを手に取らないのか。こう述べるのは、何も、諸君がこの偉大な企ての指導者たちに囲まれているからなのではない。私の極めて賢明かつ学識豊かな同僚諸氏は確かにそのような指導者に相応しい。彼らは、学識と叡知において格別優れた人々を諸君の中から育てる準備が整っている。つまりそれは、いつの日か、人類の連帯を、助言の中に取り戻し、裁判によって保護し、法律及び習俗によって改良することのできる人々である。私の僅かな能力さえもそれらの人々の間では無益とみなされないのであるならば、私の魂は決して諸君から離れる

ことはない。どうか私に注目してもらいたい。そして、私の右手を、私自身を、そして、諸君の未来を受け取りたまえ。

『法学が墮落した原因について De causis corruptae jurisprudentiae』

〔504〕親愛なる聴衆諸君、私が、幾ばくかの信頼を得てこの徳と名誉ある地位に就いたのも束の間、心は驚きでかき乱され、身体は打ち震え、私の落ち着きと冷静さは弱められ打ち碎かれるのを感じるのはどういうわけであろうか。あなた方が私に目を注ぎ、私があなた方に面と向かっているこの機会に、これほどに大きなそしてまた予想もしない動揺の原因を述べるべきであろうか。新たな思いがけない出来事、つまり、この演説、この場所、この時に不意をつかれてしまったのであろうか。しかしながら、私は、法学を講じてきた諸大学の慣例に従って、度々公に言葉を発してきた。また、これほどの国家に身を置きながら、高名で学識豊かな人々が集う機会が、話し手にとって予想外で初めての経験であるということもあり得ない。ましてや、著名な評議会から全員一致の投票により私に先日提示された名誉ある職務を引き受ける不安にかられているはずもない。そのような名誉ある職務に促された私は、私に対する公的な評価を確認した上で、フリースラントからユトレヒトへと移ったのである。しかし、私は、それに続いて私の名誉のために何が行われるかを知っている。それ故に、私の魂の気力は一層締め付けられる。というのも、このような演説という機会だけでなく、私が他の機会にあらゆる勤勉さをもって獲得してきた評価の恩恵全てが一瞬にして破滅に導かれるということ、十分承知しているからである。確かに、フリースラントの人々の名高く卓越した州政府には、二度も公式に当地へ招聘された私をその都度引き止める寛大さに加えて、私の模範的態度と当該事実に関して提出した文書を評価してもらうことに成功した。もし説得に負けた私が、更に、この地の自由闊達さ、快適さ、典雅さを想起することがなければ、三度目もまた私を引き止めようとしてくれたかもしれない。とにかく、かの州政府は、その度量の大きさ故に、文献研究によって推奨される事柄であれば何であれ愛好に値すると考えている。一方、私は、国家による寛

大さというこの特典を、運に帰すべきであろうし、あるいは、私の学説に対する報酬とみなすべきであろう。私的な声に促されて思い止まることは確かに憚られる。しかし、私を好意的に評価する国家の意向に反することは困難であるし、私に相応しくないかもしれない名誉を受け取ることは恥辱である。あり得ることだが、あちらでは、不測の事態への心構えが私に何らかの落ち着きをもたらしてくれたし、逆にこちらでは、名誉ある新たな前進によって予想外の幸運に出会うかもしれない。このように、二つの卓越した州の人々による私をめぐる争いは、長い間、私にとって誇らしいものであった。しかし、一方が私を獲得し、そして、他方が私を引き止めようと強く望めば望むほど、私には一層の努力が求められることになる。それは、提示されたものを越えて思慮深い者にもたらされる報酬として称賛されるものである。それでは、私は何を行い、何を目指すべきであろうか。賽は投げられた。ゆっくりと忠告に従うことにしよう。もはやそれを変えることできまい。たとえできたとしても、それを望むことはするまい。親愛なる聴衆諸君、人文学的課題と文献研究の素晴らしさに傾倒する諸君の才知は、私の魂の内にありありと想起される。私が鼓舞され元気づけられるのもそのおかげである。この私の任務を引き受けるにあたって、生まれ持った能力の許す限り、期待通り拍手喝采してくれる諸君に、不評を恐れることなく、法学が墮落した諸原因について述べることにしよう。

この種の主題は一般に好まれている。私も、次のような問い以上に典雅で探求に値する問いはないと考えている。それはすなわち、かつてあれほど多くの卓越した法律家たちの名で知れ渡った時代があったというのに、とりわけ不可解で不分明な我々の時代がこれほど限られた光と榮譽によって照らし出されねばならないのはなぜか、という問いである。確かに、人類の記憶上、法学が注目すべき功績をもって前進したということはほとんどなかった。この学芸を専門とする多くの人々がそれに退屈しているようにあなた方は思うかもしれないし、また、学識豊かな者にとっても、国家統治における指導者にとっても、その顕著な衡平さと柔軟な叡知の故にかつてローマ法という名が貴く尊敬すべき名称であったがためになおさら一層、空虚で、あらゆる学識と典雅さからだけでなく共同体の利益と生活からも遊離した瑣末さが目立っているように見える

のかもしれない。

しかし、市民法が裁判に際して遵守され、大学において教授されることが一般に好まれ、これほど長い年月に渡る市民法への信頼と吟味を通じて、諸民族、諸国民に共通の法であるかのように市民法を頑なに一致して支持してきたのである以上、願わくば、国家の権威と人類の名誉、そして、時の証拠に照らして、我々の学芸の不振を学芸の退屈さではなく怠惰な者たちの未熟さに帰するようにしてもらいたい。いやそれどころか、法律の活力が国家の誉れ、平穩、無事にまさに関わっているように、法律の知識の命運あるいは賢明さもまた、永遠の都ローマが最も広大な支配領域と豊かさを実現しあれほど長い年月に渡ってそれを保持するのに十分であったように思われる。それ故、これに匹敵するものを得られたならば、我々の学芸は、無力で薄っぺらくつまらないものでも、暇な人間たちによる発明品でも決してなかったはずである。スコラ学に由来し、多くの言葉と学識をもって教えられても理解されず、人間の無力さの限界と経験の枠内に留まり得ないというのが、他の知識の運命であるとするならば、それは我々の学芸にとって吉報である。というのも、我々の学芸は、現実によく負っており、人間的連帯の必要性にその由来と原因を有してきたからである。つまり、我々の学芸は、そのような人間的連帯の疑念の余地なく偉大で気高い有用性を促進し保持することを企図しているのである。しかも、我々の学芸は、民会と元老院においてその内実を受け取り、法廷でその形式を備え、その後、元首の顧問会において完成された。このように、我々の学芸は、市民的な習慣や理性を拒絶するような叡知を愛好しているわけではないし、人間の限界を逸脱しているわけでも決してない。我々の学芸は、ただ共同体の生活に寄与し、可能な限りの勤勉さを示して、公私の利益に尽くす。つまり、広い意味で、正しく、衡平で、中庸を得た学芸である。従って、弱々しく女々しいのでもないし、野蛮で粗野でもない。〔505〕私は常に人間のはかない運命を想起するが故に、賢明にも心からの寛大さをもって法律の厳格さを和らげる。とはいえ、法律はあらゆる市民的共同体にとって精神のようなものであり、しかも、法律に特有の優美さは理性に由来し、理性はあらゆる神法及び人法の創出者であって、更に付け加えれば、この理性自身を導く光は市民的叡知

である。市民的叡知はそのような栄光からむしろ離れてしまった。それ故、そのような不幸の諸原因を探究し、見出された原因に即して救済策を吟味しようとする試みは極めて正当であると思われる。

事物の本性が衰退し、あるいは、人間の知性を破滅させてしまい、人間社会の絆を結びつけている学芸を習得し擁護するのにもはや相応しくなくなってしまうというようなことはありそうもないとするならば、なおさらそうである。実際、他の諸学芸に日々生じている新たな著しい進歩を前にして、一体誰がそのようなことを考えるであろうか。とはいえ、そのような進歩は全ての学芸に当然みられるわけではない。ただし、私のみるところ、事物の隠された部分、つまり、自然の秘密が探究される叡知の領域は少なくともそのようなものとして挙げてよい。我々も信じられないほどの完璧さの榮譽に到達した時代が未だ曾てあっただろうか。卓越した人々の才能と努力によってそれが達成されたということを、我々は信じるのみならず確かめることができる。実際例えば、医学が、天文学が、工学が、そして最後に、数学が、勤勉で学識豊かな古代が目指した先よりも遥かに進歩している。自然が他の知識には相応しいのに、市民的知識にとっては冷淡で忌避されるべきであるというほど、市民的知識だけが不当な扱いを受けるべきであろうか。しかし、自然を誹謗するのはやめしよう。法がかつて優れた学芸に属していた時には、法は自然に対峙し、自然そのものを世俗的で公的な側面から考察するだけでなく、より内的で神聖な自然に注意深さと勤勉さをもって取り組んでいたと考えられる。実際、我々が、人間の知性のみならず研究やその成果からも遠ざけられずに済んでいるのは自然のおかげなのであるから。親愛なる聴衆諸君、自然とは人間の事柄の条件であり、それ故、それらの事柄が発見されるのに寄与した力は容易に保持されるが、その力が不快になれば徐々に衰え失われてしまう。家族や市民共同体の如何なる力、勢力、豊かさがとりわけ称揚されているのか、どうか留意してもらいたい。それらが存続し失われないように行われているのが教育に他ならないのではないか。これらの学芸の例からして、諸学芸の運命はそれを用いる者たちのやり方次第で色々なのであり、我々は自分たちの学芸の内にみられる怠惰もしくは無関心を嘆いているけれども、そのような怠惰は古代の厳格さへの無

知や無関心に由来している。しかしもし、誰かが、同じ道筋、そして、優れた人々がとりわけ古代において示していた魂の緊張をもって、我々の学芸の完成へと努力するとするならば、最高の知識に与るはずである。法廷における卓越した人士、そして、国家における指導者に相応しいと思われるこの行動に不足するところはおそらく何もないように思われる。

親愛なる聴衆諸君、もし、自分たちが空虚で無用な事柄を追求し、学識と叡知の典雅さや洗練から全く離れた事柄を理解し、無価値で不確かな事柄をめぐって立ち止まり、語句や文体への難癖に慰めを見出し、実際にそうではなくうわべだけ賢い人を真似るように努力してきたと考えているのであれば、実際のところ、理性は諸君の下から消え失せてしまっている。願わくばそうであって欲しくない。そのような人々は、実生活と同様に、市民的知識においても、全く重要ではない取るに足らない事柄について考察し、あるいは、予測される絶望を安易に先延ばしにしてくれる人々と同じであった。他方、法律、つまり、自然に由来する理性が刑罰の威嚇によって人生のあらゆる場面において行われるべきことあるいは避けられるべきことを命じる形式を指導する学芸は、称賛と敬意をもって尊重されるに値した。それ故、当該学芸を称賛する人々は、最大限の力を持って、名誉ある知識、そして、正義の完璧な神官を捜し求めた。それは、法律の記憶ではなく法律の理解を、学芸の初歩的で未熟で単純な基礎ではなく、学説のあらゆる部分と叡知に目を配る者であった。驚くべきことに、彼らは、次のような仕方、あらゆる神事と人事の諸原因と動向を知ろうと欲した。つまり、まず最初に、人類連帯の権利と、その由来、効力、利点を、次いで、善と悪、正と不正、誠実と不誠実の根拠、段階、区別を、そして最後に、自然が何を命じ、何を禁じ、何を未決定のままとしているのか探求し、認知し、理解することを欲したのである。また、幾何学や弁証術に加えて、非常に洗練され伝統もある諸文芸もを身に付け、ラテン語文の用法と特質、そして、卓越したローマ国民が繁栄し発展し、結局は、その巨大さに戸惑い本来の力が浪費されるほどの優秀さにまで到達する理由となった私的及び公的な習俗を、記憶力と意思をもって把握することをまた、劣らず追求した。以上の点は、公的利益のために、責任と職務の名誉のために、市民の前でも、仲



間の前でも、敵の前でも、閑暇の折にも、仕事の際にも、戦争と平和の法について、あるいは、神事と人事について、更には、重要なこと、そうでないこと、公的なこと、私的なことについて、ある時には自然に基づいて、しかし大抵は、新旧の市民法に基づいて、答えようとする者に相応しい。それらの市民法においては、その時代時代の不正が古来の習俗や戒めを消し去りあるいは曇らせてしまうことがしばしばある。法及び衡平、つまり、様々な取引、協定、法律の効力や妥当性は、これらの習俗や戒めに由来し、それらから受け継がれたようにみえるにもかかわらず、である。

ただし、人々は、上記のような単なる知識に、それがたとえ多様で膨大なものであったとしても、そこに立ち止まっていたわけではない。事物の動きに備えようとする者は、市民的義務の監督者たる学芸が、思索を通じて教授され整理され洗練される一方で、実践を通じて完成され仕上げられるということ、つまり、この学芸が、一方で原因を、他方で事物を解明し、また、一方で才知を、他方で判断力を培い、一方が他方との結びつきによって発展し、何れも他方無しには力を発揮することも秀でることもないということを十分に理解していた。それ故、彼らは、何よりもまず、豊かで詳細な知識の助力を請い、次いで、卓越した人々の随伴と手助けを得ながら、法廷、集会、会議において、つまり、内外の重要事項を取り扱うに際して、その知識を利用と実践へと移したのである。このように、彼らがその才知と学芸を教えただけではなく経験や事例によって培い確証したのである以上、彼らに並外れた驚くべき叡知、能力、一貫性が備わらないということが果たしてあり得たかどうか考えてみてもらいたい。まさにそれによって、法廷においては、食欲、傲慢、欺罔に異議を唱え、国家においては、利益を擁護あるいは容認し、不利益を排しあるいは封じ、要するに、幸福な時代における放埒を戒め、不幸な方向への衝動を妨げ弱め打ち砕くことができたのである。

古代の教えるところによれば、かのカトーは、ポルキア族の指導者であるとともに、熟練の農耕者、国家を熟知する者、法律家、偉大な将軍、称賛に値する弁論家、文芸の熱烈な愛好者であったとされる。また、かのセクストゥス・ポンペイウスは、その比類無き才知を、市民法の最高の知識と、幾何学及びス

トア派的主題の知識とに捧げたとされている。他の人々については述べておこう。というのも、簡潔で熟練していると同時に自由で清廉潔白な才知を備えた人、アンティスティウス・ラベオーは何をなしたか。これらの学芸や研究に関して、彼が何かを吟味しなかったり、証明しなかったり、何か誤って理解されている事柄を巧みにかつ思慮深く改善しなかったり、何か行き詰まった厄介な事柄を首尾良く克服し解明しなかったことがあったのだろうか。一方、サルウィウス・ユリアヌス、すなわち、彼の時代において最も叡知に富み、あれだけ多くの著名で卓越した人々の中で、ハドリアヌス帝により永久告示録の編纂と修正を委ねるに全く相応しいとみなされたユリアヌスは、多くの旧来の知識、とりわけ、同じことや類似のことを吟味したセルウィウス、オフィリウス、ラベオーの勤勉さから、敢えて何かを取り去ったり、それらに何かを付け加えたりしたのだろうか。ただし、長年の慣習、そして、新旧の事物や語句をめぐる膨大な学説が、彼に、叡知ある人々がそれ以後学芸を評価する際に依拠した基準、そしてまた、共同体の生活において各人がその権利について判断する際に依拠した基準を利用する勇氣をもたらしただけの場合は別であった。更に、アエミリウス・パーピニアヌス、すなわち、近衛長官パーピニアヌスが、市民法の領域において神と崇められ、毎年の祭日にその不死を賛美され、〔506〕勤勉な若者が彼に因んで勉学の3年目にパーピニアヌスの子と呼ばれるというところまで、いかなる仕方でも到達したと諸君は思うであろうか。パーピニアヌスの弟子であるドミティウス・ウルピアニウス、すなわち、アレクサンデル・セウエールス帝の教師、顧問、近衛長官であり、その会食中、入浴中、散歩中の談話や、語句をめぐる卓越した考察さえも称賛的となったウルピアニウスは、ヘーリオガバルス帝の驚くべき軽率さ、愚鈍さ、卑劣さによって失われはしないが破滅に瀕した広大に広がる領土の重みを支え、偉大な勇氣と相応の叡知をもって最良の国家を目指して古来の学問を回復したのではなかったか。アレクサンデル帝が最高の皇帝と記憶されているのは、間違いなく、彼がウルピアニウスの助言を用いたからである。しかも、私は、これらの人々や他の人々の著作断片を読む度、どれを最初にどれを最後に、あるいは、どれをより多くどれをより少なく称賛すべきか分からないでいる。私が求めているのは、

文体における典雅さ、簡潔さ、崇高さであっただろうか。取り立てて典雅で簡潔で重々しく思われるものは何もなかった。私が追求したのは、解釈や論究における繊細さ、思慮深さ、勤勉さ、人間性、控え目さではなかったか。これほど多くの人々がこれほど多くの任務に関わることができたのは如何なる徳と能力の故か、私には分からなかった。学説が判断力に、正義や摂理が学説に、慎重さ、注意深さ、勤勉さがこれら全てに劣るわけでは全くなかったのである。結局のところ、公法及び私法の保護者もしくは創出者であるかの人々が私には天から降り立った者であるかのように見えるのをどうして隠すことができようか。

これらの点を広く知らせるためでもなく、称賛されて当然の人々を称賛したいがためでもなく、私はただ単に、彼らがその名声に満足していると言っているのである。彼らは私の推薦など必要としてない。私はただ、これほどの年月を経てもなお叡知と学識の榮譽を保ち続ける学問の連続性を示したかっただけであり、お世辞や嫉妬とは全く無縁である。我々の時代がこの榮譽からどれほど長い間遠ざかっていることか。それは、事の成り行きか、我々の欠点の故か。述べるのは厭わしいが、述べるなくてはなるまい。実際、彼らのような道筋を辿って市民的賢慮に向かい、彼らのような情熱と不屈さに促される者が一体どれだけいるだろうか。市民的賢慮は、かつてそれが誰の目にも心にも困難であるが高潔なものと映った頃には、家にあっては神託に基づくかのように問いに答え、法廷においては賛嘆を受けつつ弁護し、審判人席や法務官席にあっては威厳をもって陪席あるいは主宰し、民会、元老院、元首の顧問会にあっては、以上に匹敵する大いなる卓越性をもって、一人の人間、一つの都市、一つの属州などではなく、領土全域の公法及び私法、つまり、人類全体の平安について目を光らせるものと考えられていた。つまり、市民的賢慮は、それぞれにおいて卓越し専ら榮譽を志向する者に、市民的賢慮に対する尊敬の念を植え付けた。彼にとって、市民的賢慮は、偉大な人々の似姿ややり遂げられた高邁な官職に劣らない名誉となるはずである。ところが今や、面目も力も失い、裸のままぼろ切れと年月に覆われた市民的賢慮は、今や古来の威厳と気品を十分には保っておらず、むしろ、日々の雑事に身売りしている。それ故、我々は、市

民的賢慮が、良き人々にとっても怠惰な人々にとっても、価値のないものとなり、ただ卑俗な瑣末さと見なされていることに驚く。

そこで、親愛なる聴衆諸君、私は、次の点が法学墮落の第一のそしてまた固有の原因であると推測している。すなわち、市民的賢慮が、至る所で、卑しいものと信じられているという点である。しかも、我々が法律家という極めて威厳ある名前と呼んでいるのは、神事と人事に精通し、公私の任務の遂行に有用で相応しい者などではなく、おそらくは、曖昧で無力な知識から名誉ではなく専らその貧弱な報酬の利益を期待するような弁護士であろう。このようなことに慣れきっている人々が、卑しい不名誉な技術であるかのように法学に接することなく、あるいは、国家に関わり、人々の才知や時代時代の出来事に応じて変化する多様な利害の洞察であるかのように、法学を、何世代にも渡って子孫に至るまで相応しいものとして引き立てることなど、果たしてあり得るだろうか。彼らは、法学を、天から激しく落ちてくる雷雨、あるいは、夜半に土から生えてくるキノコか何かであるかのように思っているのであろうか。彼らは、ローマ国民の法律について聴講する前に、叡知と人文学の研究、あるいは、自然法や万民法の知識でその魂と頭脳を満たしているだろうか。彼らは、ローマの新旧そして公私の習俗を理解するため、そしてまた、ラテン語文の用法と特質を覚えるために、学業にはんの僅かな努力さえ払っているだろうか。彼らは、法学それ自体について敢えて判断を下せるほど準備を積んでいるのだろうか。そしてそれは、学識ある解釈者や学識のない解釈者はもちろん、法の設計者に対しても、真理に関する論争を敢えて開始するほどの準備なのであるか。そうではない。それどころか、洗練されず粗野な人々がそれらの解釈者や設計者に仲間入りし、彼らは、本学芸の何らかの手短な便覧をやっとの思いで理解し、訴権の定義や分類に関する儀式ばった言い回しを記憶し、広範に及ぶ本学芸を簡単な図表とほんの僅かでしかもしばしば不適切な問いへと縮小しさえすれば、それで自らは大いに学識豊かで幸福であると思いこんでいるのである。その結果、あらゆる場所、あらゆる時代の、しばしば異なり矛盾する人知にもとづいた市民法、教会法、固有法、あるいは、各習俗が無知の故に混同されることになる。一方、素直な心で本性の声に耳を傾け、如何なる権威にも法

学の保証を委ねず、歴史の助力、時代の区別、そして同時にまた、市民のおよび自然的理性に依拠しつつ、何事も真面目に理解しかつ究明し、ローマ人の法律や習俗を、どこかの異国や蛮族の風習と言葉ではなく、ローマ人の風習と言葉に即して解釈するならば、それは、彼らにとっては、正しい判断などではなく、法律家としての権威に悖り、文法学者や哲学者の戯言に与するものであって、更に次のようなことを行うならば、一層滑稽なこととみなされるであろう。すなわち、文書の何か不条理で理解困難にみえる箇所を、写本作成者やその後の書籍出版者の入念さに従って究明し、(これは偉大な学芸と勤勉さに付き物であるが)才知の豊かさ故の逸脱を原状に復し、欠点や混乱を取り除き改良し、古代の人々の文書がユスティニアヌス以前や以後に破損されあるいは改竄された際に用いられた記号や印しの謎を慎重に推測し、古代にはまだ知られておらず、その後の研究で見出され、書籍印刷業者の怠慢によってしばしば乱される句読点を、ほとんど独力であるべき場所に戻し、不当な占有について特示命令が下されているかのように「暴力、隠蔽、許容によって」という語句をどこかに忍び込ませているような注釈や校異を排除し、長い年月や、編纂者の油断、印刷業者の愚かさをもたらした欠落を、古典期ローマの法律家の著作断片や、テオドシウス帝の勅法集、あるいは、ギリシャ人たちの権威に従って、補充し導出し、学説彙纂の全体の構造を吟味した上で、法の変遷や推移、あるいは、特に目を引く著しい法の発展に目を配り、その上で、学派の如何なる論争が後を引き、どの論争が古代において決着したのかを考察し、それらの内のあるものを法の準則や規則に組み入れ、学説彙纂の多くの箇所や、同様に、勅法彙纂の多くの勅法において、反対からの推論や結論からの推論が、原著者の意図に反して行われているが故に、それらを退けるべきと考え、法律、民会決議、元老院決議、法務官告示を再構成し、夥しい分量の注釈の代わりに、記名の信頼できる証拠に基づいて、それらを古代の人々が残した断片に適合させ、疑念を解消し、インテルポラティオを発見し、引き離され散逸したものをまとめ、結びつけ、一つにし、脱落したものを探しだしあるべき場所に戻すことのできる方法、要するに、法律の変遷を、壁に描かれたあいまいな絵や駄弁によってではなく、理性によって司ることのできる方法を見出すならば、であ

る。これら全ては、大方、極めて哀しむべき愚かな勤勉さに属し、確かに真理へと導かれるかもしれないけれども、日陰から日向へ、そして、競技場、とりわけ戦場に出向く際には、安全でもなく、役にも立たず、それ故、忘れるべきだと人々は考えている。〔507〕そこでは、時代の習俗と新しく目には見えない盾を用いるべきであるとされる。同様に、真理ではないことが安全であるかのようにみなされ、あるいは、それが成文法に代わるものとして尊重され、正確な認識が無益とされ、そしてまた、愚かな事柄だけが実務に適し実務によって維持され得るというのである。

親愛なる聴衆諸君、以上の点が明白で疑いようもない事実であることにもうお気づきなのではないのだろうか。実際、多くの人々は、怠惰や無知に導かれ、報酬への期待、あるいはまた、邪魔になるほど混み合う講堂を誇る見栄に駆り立てられて、聴講者たちに日々似たようなお伽話を吹聴し、そのような怠惰と無為の誘惑によって高貴な学芸を減ぼしても、決して憚るところがない。更にまた嫌悪すべきなのは、若者にありがちな軽薄さの故に安定で盲従しやすい心を墮落させ、両親の願いと国家の援助を台無しにすることである。このような言葉だけの見せかけと欺瞞によって、彼らがもたらしているのは、次のような帰結に他ならないのではないか。すなわち、大きな期待を背負い優れた才能を備えた若者が、大学で古代の法律について聴講せず、優れた著者の作品を繙くこともなく、学習の諸段階をおって最も重要な事柄へと導かれることも、真に誠実な学業へと促されることもないために、勉学に相応しくまた専念できる時期を放埒と無為によって浪費し、このような逸脱を経て一人前になった後にも、前もって聞いたことも読んだことも学んだこともない事柄を追求する欲求も機会も持たず、老年に至るまで愚鈍さと悔恨以外に何か目を引くものを携えることはないのである。

このように怠惰で哀れな精神は、神の許しを得て、今なお無能さ一般を理由に隠蔽されている。非常に頻繁に聞かれるのはおそらく次のような主張であろう。すなわち、かの古来の王道が、陰しく困難で、見通しも利かず、長くて厭わしい道で、しかも、僅かの勤勉で優秀な人々が多くの夜業と計り知れない努力をもってしてもほとんど踏破不能であるのに対して、こちらの卑俗で安易な

道は、平坦かつ真っ直ぐで、万人にとって快適であるばかりか愚鈍な者や錯乱した者にとっても決して通りにくい道ではなく、その簡便さは、人間の境遇のはかなさ、というのも、そのような人間の境遇は、成果を手に入れるべく学業を急がせるものであるから、この点においても実に相応しいという主張である。従って、多くの人々が、気紛れや才能の愚鈍さによって時間と労力を無駄にしている以上、月並みで簡単極まりない段階に留まり、できるだけ早く確実に法学に到達するほうが安全である。しかしながら、諸君、不死の神に誓って、私は敢えて言おう。以上のように考えている諸君に訴えよう。一体何時、自然が人間に対して悪し様に振る舞い、これほどの力強さと優秀さを生まれ持った人間たちについて、彼らに値する才知を認めることさえも拒絶したなどと考えられるだろうか。むしろ我々は、自然が、鳥に対して速さを、犬に対して嗅覚を、狼に対して残忍さを恵み与えたように、我々人間に対しては創意溢れた知性を与えたと考えるべきではないのか。また、人間同士を比較することをお望みとあれば、運命が人間をその富、生まれ、名誉に応じて区別するということを私も認める。しかし他方で、良識以上に人間間で公平に分配されているものが何かあるだろうか。実際そうではないか。大抵の人々はそうであると我々は考えるべきである。彼らは少しでも成長すれば、尋ねることができ、学ぶことに熱心かつ相応しくなるのではないだろうか。幼児たちにおいて既に、神の精神の火花が、しかも衝動の如く、発せられるのではないだろうか。これらのことが徐々に忘却されるとするならば、非は文化と自然の何れにあるのだろうか。私は、後者をその罪から解放し、愚鈍で無用な者たちが、欠陥の故に目立つにすぎない奇形者や異常者と同じように、人間としての本性を欠いて生まれ出たものと解する。それ故、段階を踏んだ勉学に従事し、(何事も悪く言いたくはないが) 無益な事柄に費やされた時間を市民的賢慮に用いるべきではなかろうか。人間の肩が背負えないもの、そしてまた、徳という優れた導き手の下で才知が征服できないものなどあるだろうか。

挫折する人々は確かに存在する。たとえそれが真実であっても(そもそも全てにおいて完全なものなど存在するだろうか)、全ての者がたとえ勤勉であっても手に入れられないからといって、あなたに良識が分け与えられていないな

どと考えられるだろうか。あなたはそうは思わないはずである。実際、収穫が耕作の労に希望通り見合わないことも度々あるし、嵐が航海者の見通しを妨げることもしばしばある。しかし、だからといって、誰が自分の農地を放棄し、誰が海の仕事を嫌うだろうか。そのような者は誰もいない。従って、適切なやり方で法学に取り組み始めた何者かが希望を失ったからといって、なぜ我々が法学を心から称賛し尊重することを妨げられねばならないのか。たとうまくいった人は僅かであるとしても、卑俗で簡便な方法を用いた者よりも多くの者が、この方法で、この名誉ある知識を獲得している。前者の人々は、自らの港に辿り着き、許嫁、つまり、貧弱で安っぽいものを得た者たちと同じ意味において、挫折するものと私には思われる。全てを求めようとする者が、そのような貧弱で安っぽいものへ向かうならば、それ以上のものは何も手に入れないであろうけれども、それらに向かわず、もう一つのものに足を踏み入れるならば、最高に近い成果を達成できるはずである。この叡知に至る道程において重要なのは、これら何れの道を進むのかということのみである。その上で、賢く知性ある者が考えるべきなのは、何についてどれだけの労力が節約されるかではなく、何から出発すべきか、である。もし、古来の王道と呼ぶに相応しいあの道そのものが、未経験者にそうみえるほどには決して困難でも険しくもないとすれば、どうであろうか。というのも、山を見るように遠くからこの道を眺める者は、目の錯覚や臆病さの故に、全てが深淵や絶壁に見えるように思うからである。しかし、そこに近づけば近づくほど、場所と場所の間の距離や時間がはっきりしてくる。それらの距離や時間は、険しい場所であるとの思いこみを先行させる前に、今や勾配の緩さや登り易さに気づかせてくれる。そのような勾配であれば、いつでも知らぬ間に、言うならば一步一步登ってしまえる。だからといって、ある人にとって、開けた平原を眺めることの方が平易で分かり易く、目と魂の双方に入り込み、また、暗闇や霧によって見通せなかったり取り巻かれてもない叡知を吟味することが、それだけ一層快適であるということとは否定できない。確かに、人は、唯一つの永久不変の自然法則があらゆる民族をどれほど駆り立てているか、大きな喜びとそれに劣らない利便さとともに気づくであろう。これに対して、市民法は、至る所で相違し、しばしば矛



盾して書かれており、常に同じ仕方で失効するわけでもなく、時代時代の習俗や国家の形態、後続の利害関係に応じて変更される。十二表法や、そしてその中に、書かれた簡潔で古代特有の峻厳さに満ちてはいるけれども、ローマ人の重大な危機に際して、そしてまた、未だ健全で汚れない時代に、極めて思慮深く書き留められた王の法を眺めることほど快いことはあるだろうか。そしてまた、それらがあれこれの法律によって公に廃止されたり回復され、あるいは、法務官によって定期的に発せられる緩やかで民衆寄りの告示の下で、多くの場合、美辞麗句の引用や、巧みな言語表現、比喻によって、緩和され、回避され、変更されるのを見ることほど魅力的なことはあるだろうか。更に、これらのいわば源泉と源流から生まれた法律訴訟や、アエリウス、クラウディウス、ブルートゥス、ムキウス、アクィーリウス、スルピキウス、トレバティウス、アンティスティウス、アティウス、サビーヌス、カッシウス、プロクルス、その他永遠に尊敬されるべき名前の下に法準則が確立された法廷弁論を見出すことほど愉快なことはあるだろうか。それらの法準則によって、彼らは、法律の曖昧さを処理し、狭苦しい法律を拡大し、適用範囲を限定し、厳格さを緩和し、要するに、公私の豊かさが増大するに応じて（例の如く）習俗が変化しても、古来の法律を豊かで平和な時代を許容できるようにしているのである。一つ一つ究明する者にとって時間は不足した。しかし、それら日々においても、優れた道に導かれた魂は大いなる喜びをもって進むことができた。それ故、元老院議決や、それが布告されたものにせよ、裁決として下されたものにせよ、解答されたものにせよ、元首の勅法について、今更何も述べようとは思わない。（法廷弁論が排除されたのか無視されたのかは定かではないが）ゴルディアヌス帝以降、結局、法学全体が、それらの権威に与することになった。とはいえ、法学が元首の解答や裁決にそれほど従属していなかったという点について黙っていようとは思わない。ましてや、事実に着目するこれらの解答や判決は、勅法の形式に移し換えられたり、実務において承認されなければ、時に否認されることがあり、法律と全く同じ権威を常に有していたわけではない。他方、古来の学問の魅力や楽しさについてはもう十分に述べた。

親愛なる聴衆諸君、この学問の道は非常に長いので、我々の人生の短さを考

えて勉学を急ぐべきではないのかという危惧が今なお見受けられる。〔508〕残念ではあるが、言葉の曖昧さが諸君を欺いている。迅速と呼ばれているものは遅滞であり、便覧と呼ばれているものは叡知の欠乏である。多くの人々は、人生が短いことに気づくのではなく、自ら人生を短くしており、人間の過ちを自然のせいにしてしている。他方でもし、彼らに、無益で有害な事柄への欲求と同じだけの良識の欲求があったとすれば、実際彼らは、人生が上手く配分されていて長いので、本学芸の修得にも十分足りると考えたはずであるし、事柄の膨大さや難解さに妨げられ圧倒されて悲鳴をあげることもなかったはずである。今や、身体を気遣うばかりの者たちは、魂の修養を怠り、叡知を籠絡するもの、つまり、迅速さを切に求めている。まるで、仕事の仕上げにも最初と同じ道具が用いられ、成熟が未熟さで査定されるかのようなのである。しかし、我々が物事の呼び名を混同している。未熟な筆使いで初めて物の輪郭を描くことを学んだ者を画家とは言わない。同様に、初歩的な文献をようやく理解した者が、学問の世界を極めた者と称されることもあり得ない。実際、我々は、法律の初歩的教則本によって法律家の善し悪しを判断するだろうか。そのような教則本が新たに別の事柄へ進もうとしている人々にとって必要であることは私も知っている。そもそも、我々は文献なしに済ますことはできない。しかし、叡知を追求する者がそれら文献による知識に留まることはないのと同様、法学学習者が法学提要や類似の法学便覧によって十分に学べるとは思わないで欲しい。確かに、そのような便覧を読み手元に置くべきであり、また、広大な海原においても常に一定で信頼できる星座のごとくそれらに向かって進路を取るべきである。しかしまた、もっと高い志を持つことを思い止まるべきでもない。法学提要の詳しい講述によって学業全体の骨格あるいは四肢がもたらされたならば、それに引き続いて、学説彙纂と勅法彙纂の有益かつ入念正確な講義、つまり、いわば神経や筋肉によって、賢慮のあの逞しい活力を引き締めると同時に増強すべきである。しかし、親愛なる聴衆諸君、私は何かを言い忘れていたのではなかろうか。というのも、多くの人々がこの優れた学問に不満を抱き、それ故に、法学は狭苦しい場所に閉じ込められてきたからである。諸君は、これほど優れた諸法文が一体何に由来し、その後どうなったとお考えだろうか。願わく

ば、これほど正当な懸念に前例はあって欲しくない。しかし、誰の手元にも眼前にも、ティトゥス・リウィウス、そしてまた、ディオンの・カッシウスといった、何れも極めて著名な著作家の姿がちらつく。実際、それは、分解され、散逸し、多くの部分を切り取られた著作家である。とはいえ、アンナエウス・フロルスの抜粋以外に、そしてまた、クシフィリヌスの抜粋以外に一体何が彼らを無力にできただろうか。また、学問熱心な人々がポリュビウスやトロージス、ポンペイウスその他の人々を抜粋し要約したりしなかったならば、我々は完全な彼らを享受できたであろうし、古代の事績の記憶にこれほど大きな欠落は生じなかったであろう。歴史だけを証拠として呼び出すべきではないとすれば、雄弁というものを失わせたの一体何であったのか。それは便覧の類ではなかろうか。つまり、若者たちは、彼らが論じる際に用いるべき語句に出会う前に、それらの語句を辺り構わず非難している。しかるに、弁論の能力とは生まれつきのものではなく修得されるものである。これ以上は言うのはやめておこう。一体何が、かのユリアヌス、パーピニアヌス、パウルス、ウルピアヌスを、また全てを言ってしまえば、古代の人々の法学を、取り去り切り捨てたのであろうか。便覧の類ではなかろうか。ユスティニアヌス、最も神聖なる君主よ、私は、この世界が多くのことを貴方に負っていることを否定したりはしない。貴方は神の如き人々のこれほど素晴らしい著作断片をこの世界にお残しになり、古代の叡知を称賛すべき助言者に委ねた。しかし、次のように言うのを貴方はお許し下さるだろう。すなわち、貴方は、当時残されていた彼らの著作を破損したとまでは言わないとしても、というのもそれでは無礼にすぎるのであろうから、他方でしかし、それらが破損されるにまかせてしまった。学校で講義され、裁判において引用され、生活の規則とみなされ遵守されることを貴方が望んだ花々を、それらの著作から摘み取ったまさにその時に、著作そのものは失われたのである。もしそれらが残されていたならば、学問と国家にどれほど寄与したか無視できる者がいるだろうか。テオドシウス勅法集、ルキニウス・ルフィヌスによるものとされる対照法文集、そして、ウルピアヌス、パウルス、ガイウスの著作のかの諸断片が、ギリシャ人の解釈者について何か述べることはここでは止めるにしても、発見され再び光の下に置かれて以来、学識

が生来の知識を如何に凌駕するか人は知っている。

私の話がどういうわけでこのようなところに落ち込んでしまったのか分からない。そのために私の話は諸君にとって恐らくは不愉快で無益なものとなってしまったように思われる。しかし、親愛なる聴衆諸君、話がここに及んだのは、諸君に法学が墮落した原因を理解してもらい、そしてまた、法学を復興させる救済策は、かつて法学が生み出されかの偉大さへと導かれた際の方策以外にはなく、要するに、そのような方策の中から遥かなる古代が後世に残したものの全てを、注意深く保持し、許される限りにおいて利用すべきであるということを知ってもらうためである。それらが、この学芸に威厳を与え、この学芸を敬愛する者たちに学識と栄光をもたらすことになることになると諸君には信じてもらいたい。

それ故、行動せよ、学究に専心する気高く高貴なる若者たちよ（実際私は諸君に向けて話しているのである）。敢えて言おう、かの古来の王道を進むべく行動せよ、と。この道は、その昔、アンティスティウス、ユリアヌス、ポンポーニウス、パーピニアヌス、ウルピアーヌス、パウルスその他の思慮深い大家たちが、少し前には、アルキアトゥス、ブダエウス、ドゥアレヌス、ホトマヌス、ドネルス、ギファニウス、ゴトフレドゥスらの大家たち、そして決して言い忘れてはならないクヤキウスが通った道である。何かの模範に従うべきであるとするならば、実際、彼ら以外の何に私は依拠すべきであろうか。というのも、彼らの徳、才知、そしてまた、不滅の名声は、未だに賛辞が尽きないばかりか、あらゆる嫉妬をも凌駕しているのであるから。もし、そのような模範が市民に相応しく多忙であったとされるその経歴から取り出されることを諸君がお望みであれば、その学説と研究成果によって経歴それ自体も広く知られ評判となっているこれらの人々を記憶する相応の備えが私にあったことであろう。しかし、ここでは見識ある諸君の寛大さに甘えることにしたい。とはいえ、ウィグリウス・ゾイケムス・アイタヌス、ヨアキムス・ホッペルス、エルベルトゥス・レオニウス、フーゴー・グロティウス、そして、アントニウス・ファーベルの名をここで挙げないわけにはいかない。諸君が、彼らの虚飾を排した真の学識を、大学、法廷、国家のいずれにおいてであれ、最高のものとし

て評価しているのであれば、なおさらそうである。つまり、諸君が、古い法学、つまり、非常に優れた時代のしかもその最初期において既に盛んであった法学に、現在の勢いを失った法学で敢えて対抗しようとする人々に失笑し、そしてまた、優れた人々にはごく普通の法知識で十分で過剰な法知識は不便であり煩わしいだけであると反論するであろうことは、この私にも十分承知である。しかしながら、言い訳は無知に阿るだけで、決して学問の王国を支えることにはならない。それは、忌避されるべきことを称賛するようなものである。それ故、もしあなたが紳士であるならば、どうか奮起して、優れた才能が卓越した名声を伴う教養へと近づくことを常に可能にし今もなお可能にし続けているこの学芸に心を向けてもらいたい。そして、市民的知識を手綱で引き止めるのではなく、多くの経験と尽きることのない努力、研鑽によって、とりわけ榮譽ある知識を身に付けるべく試み急ぎ、同時にまた、これほど短い人生を、もしそれ故に叡知と学識が遠ざってしまうように見えるのならば、長く永続的なものにしてもらいたい。私自身もまた、あなた方と共に、そして、この町とともに、そのように努める所存である。そのような平和な闘争を私は大いに期待している。とりわけ法廷と国家における注目すべき偉業と模範を前に、更には、私の同僚、つまり、大学における諸君の極めて学識豊かで聡明な教師たちの下で、若さと諸君の熱意がなし得ないことなど実際あるだろうか。彼らは、諸君に真の徳と叡知に至る道筋を指示し公開し、そしてまた、あらゆる武器を備えた正義の軍勢を戦場に送り出すように、あらゆる知識によって武装した者たちを法廷と国家に送り出すべく決意を固めている。もしそのような教師の一人として私の手助けが必要とされたならば、才能と学識においては多くの人々に劣るとしても、諸君を支える努力と熱意においては誰にも負けなつもりである。私のこの晴れの日には将来の戦いの条件を知りたいと望むのならば、弱々しい条件をや甘い条件を期待してはならない。むしろ、死に瀕してもなお誠に英雄的で力強かった皇帝、セプティミウス・セウェールスに倣って、この合言葉を諸君に送りたい。「さあ力を尽くそうではないか」。